

信者列伝

今日は午後 1 時半から、一昨日召された鬼頭澄子さんの葬儀をご家族と行います。みなさまにもお祈りいただきたいと思いますが、葬儀の準備をいたしますとき、わたしは召された方が主イエスとどのように出会い、そして、主が語られた御言葉によって、どのような生き方を形作られてゆかれたか。また残された家族や友人、信徒の方々に何を手渡さそうとされたかを聴き取ることに全力を傾けます。パウロが牢獄の中からフィリピの信徒たちにむけて手紙を書いたとき、彼の心を占めていたのも同じ関心だと思っています。フィリピは、パウロが海峡を越えてヨーロッパに渡った最初の伝道地であり、ここに誕生した信徒の群れは生涯にわたってパウロに特別な気持ちを持ち続け、パウロがこの町を離れて次の伝道地に向かった後も絶えず祈り、贈り物を届け、パウロが囚われの身になった時は心配のあまり、獄中におかれたパウロの身の回りのお世話をするために人を送ったほどでした。それが今日の箇所に出てまいりますエパフロディットだったのです。パウロがこの「テモテとエパフロディットを送る」という箇所を書いた直接の動機は、フィリピの人々が自分のことばかりにかまけて、他人のことに心を向けていないのではないか、そう思われるフシがあったからです。このように書き送ったのは「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になられ～、へりくだって～、十字架の死に至るまで従順で」あったというイエスさまの姿勢と対比することで、パウロは、わたしたちの人格と生き方の根拠がキリストのこの生き方にあることを示し、そしてこのキリストに学んで生

きている者がわたしパウロであり、テモテとエパフロディトも同じなのだと言いたいのです。すでにパウロは牢に囚われており、処刑されることも覚悟しています。そのパウロが、いまフィリピの信徒たちのことを思ってふたつのことをなそうとしています。テモテを派遣し、そちらの様子を知ってわたし自身も励ましを受けたいという願いと、あなたがたのところからわたしに仕えるために派遣されてきたエパフロディトを今すぐ送り帰すという計画です。このうちテモテを派遣することは「まもなく」「自分のことの見通しがつき次第すぐ」だと告げています。これは裁判の結果を待っているからです。ここでわたしたちが注目したいのは、これらの計画をパウロが「テモテをそちらに遣わすことを主イエスによって希望しています」、また「わたし自身、まもなくそちらに行けるものと、主によって確信しています」と言い表していることです。こういう言い方を普通わたしたちはしません。なぜ、わたしは希望する。わたしは確信する、ではなくて、わたしは「主イエスによって」希望する。わたしは「主によって」確信するのでしょうか。これは単なる言い回しの問題ではありません。そうではなく、パウロのキリスト者としての人格の形成とそれにもとづく生き方がはっきりと現わされているところです。これは「それがもし主イエスの意志であるならば」わたしは希望する、ということです。主の御心が第一なのです。裁判の結果はどちらに転ぶか分からない。だから、テモテの派遣はともかく、パウロ自身がフィリピに行くことが出来る可能性は実のところかなり低いと言わざるをえない。それでも、パウロは「わたし自身も間もなくそちらに行けるものと、主によって確信しています」と述べるのです。「主によって」とは、この主イエスのうちこそ、神さまがわたしを

御子の死と引き換えにしてまで愛して下さったことを疑うことのできない場所、ゆるぎない神さまの真実が示された場所だからです。「主イエスによって希望する」、「主にあって確信する」ということは、自分の希望を絶対に実現するために神さまの力を借りるということではありません。そうではなく、神さまご自身が正しいとされる時と方法に、最終的な判断をゆだねることを意味しています。神さまは、わたしを助ける力も手段も、その意志も持つておられる。それはキリスト・イエスのご生涯に示された愛において疑い得ない。だから神さまがわたしにもつておられるご計画、御心の実現にもっとも相応しい時と場所において最善をなされることを信じて、わたし自身の十字架を負って生きることが、わたしたちの希望の持ち方となる。それはわたしたちの不条理にすら見えるすべての営みが、なお神の摂理、恵みのご支配のなかにおかれていることを信仰によって認め、受け入れることによって成立するキリスト者の生き方、わたしたちの可能性を示しています。この福音に生かされ、キリスト・イエスへのまねびによって成り立つ信徒たち一人ひとりの献身、奉仕、とりなしの業が、教会をこの世とは違ったものとするのです。そして、それは教会の交わりに表されることがエパフロディトの例で明らかになります。

「ところで、わたしはエパフロディトをそちらに帰さねばならないと考えています」、ここでパウロがエパフロディトを、テモテとならべて語るのには慎重な計算があります。テモテについてパウロは最大限の賛辞を送ります。いわく「テモテのように、わたしと同じ思いを抱いて、親身になってあなたがたのことを心にかけている者は他にいないのです。他の人はみな、イエス・キリストのことではなく、自分自身のこと

を追い求めています。テモテが確かな人物であることは、あなたがたの認めるところであり、息子が父に仕えるように、彼はわたしと共に福音に仕えました。」、手放しで誉めていますね。一方、エパフロディトはどうでしょうか。実は、このエパフロディトという人物はフィリピの信徒への手紙にしか登場しないので、ここに書いてある以上のことはなにも分からないのです。しかし前後の文章から、この人物がフィリピから、パウロの手助けをするために贈り物を携えて送られた、いうならばフィリピの人々がパウロに対して持っていた愛情を皆に代わって現わすための人物として選ばれ、派遣されたことが分かるのです。しかし、残念ながらエパフロディトはその任務を最後までやり遂げることが出来ませんでした。彼は重い病気になり、ようやく主の憐れみによって一命を取り留めたと書いてあるからです。しかもそのニュースがフィリピの人々にも伝わったことで、みな心を痛めましたし、またエパフロディト自身もそれを知って、志なかばにして病に倒れて使命を全う出来ないことに対して心苦しい思いをしていた。そういう状況を、パウロが見て取って、エパフロディトを、彼自身のためにも、またフィリピの人々の為にも、これ以上、自分の下に留めずに送り返すことが必要だと判断した。パウロが自分のことだけしか考えない人物であったなら、牢屋に居て不自由な自分の生活を世話する人物を遠ざけることはしなかったでしょう。しかし、主にあって考えるときに、どちらが御心に適っているか、福音の前進に役立ち、主の御名があがめられることであるか、それを判断してパウロはエパフロディトを送り返します。そして、志なかばにして福音の前線から離脱するエパフロディトを、パウロは最大級の賛辞をもって送り出すのです。「わたしの兄弟」、「わたしの協力

者」、「わたしの戦友」、「あなたがたの奉仕者」、「わたしの窮乏の時の奉仕者」、彼はキリストの業に命をかけ、死ぬほどの目にあった、実際、病を得て死にかけたと言うのです。エパフロディトを表現するときの、このパウロの筆遣いは、意識してキリストの受難を語る聖書の言葉と重ねられています。エパフロディトの献身は2章6節以下の「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。そして死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」という、キリストを誉め讃える讚美に寄せられています。この「死に至るまで」の響きがエパフロディトの働きを述べる時にもこだましているのです。キリストと同じような従順をエパフロディトも生きたと言うことによって、パウロは、エパフロディトを、最高の配慮をもって送り返す。そして、29節がきます。「だから、主に結ばれている者として大いに歓迎してください。そして、彼のような人々を敬いなさい」とフィリピの人々に願うのです。この「主に結ばれている者として」互いを認め、受け入れあうことが、教会の交わりの本質です。「主に結ばれている者として」彼を迎えなさいとは、十字架でわたしたちの背きの罪を負い、赦しの愛を示して下さったその愛のもとで交わりを形作ることにほかなりません。テモテのような練達の人物だけでなく、ミッションを途中で中断しなければならなかったエパフロディトも「主の目に値高い」ことをパウロはフィリピの人々に示そうとしています。そのために思いを果たせず、母教会に帰ろうとしているエパフロディトを、キリストに重ね合わせることで、わたしたちの交わりがどういうものであるかを指し示しました。それは、すべての人が主の目に値高

いからに他なりません。パウロはこのように「主に結ばれている」、「主にある」ということから、すべてのことを読み解いてゆきます。自分を第一にするのではなく、主イエス・キリストによって示された神の恵み、主の赦しの愛から、全てを望み、働き、感謝をささげます。パウロは自分自身の立場を絶対化し、固執しようとはせず、フィリピの人々のために、自分を無にして、愛と配慮を働かせます。それが互いに喜びをもたらすことだと知っていたからです。そしてこれが赦しの愛に生きることを知らない世に対するわたしたちの証なのです。神さまは他のどの場所でもなく、神を礼拝し、神を喜び、御言葉に賭けて生きるわたしたちのうちに働かれ、ご自身を現されます。この恵みをともに味わい、わたしたちの主を喜び、それぞれの働きへと送り出されたく願います。

お祈りいたします。